

酔  
談  
放  
談

—岩織さんを囲んで—

岩織 わたし、中学の時だけどね、海に出てたんですよ。ゴム靴とゴム合羽、それからトンボといますけど、イカを釣る道具、それをもって船に乗るわけですよ。船が出るのはだいたい三時から三時半。沖に向って一晩釣って朝帰ってくるんです。家へ帰ってごはん食べて中学へ行って、午前中でおわって午後は出なくて船に乗るんです。わたしらは六月から一二月まで、つまり半年ね、午後は全部、わたしだけじゃなくて仲間は全部。それでイカを釣ったんです。最近はいろんなイカが出てますけど、イカは釣りたてが一番おいしいんです。釣りたてが。イカは七変化するんです。雪之丞七変化。

取り急ぎご連絡いたします。  
「永嶋緋子の生涯」の著者、岩織政美さんが今度の日曜日に上京されます。つきましては、10月4日、岩織さんの上京を期して、囲む会を催したいと存じます。特別、形式張ったことはしません。ただ集まって飲み食いしようということだけです。ですから、何を囲むのか、酒ではないかとの声も確かに聞こえそうですし、相京が飲むための口実を見つけたのだと言われるかも知れませんが、あえて否定はしません。ただし、酒を強いる方、愚痴を言う方、何かに急かされている方は御遠慮下さい。ふしぎな方は大歓迎です。

記

日時 10月4日(日曜日)午後5時より  
場所 新宿「自在」(新宿歌舞伎町 209-1179)  
会費 3000円

連絡方法 小平市花小金井南3-11-8  
相京 範昭  
TEL J424-63-9903  
館 03-812-3033

1987-9-30

とてもいい色ですよ。内が赤臍といいますけどそれがきれいに見えますよ。黒くなり紫になり白くなる。イカはスルメイカ。最高なのは釣りたてのイカをじゅうじゅう焼いてちよつと塩ふって食べるのが最高。

相京 それで一杯飲むという。

岩織 そうです。ところがなかなかそれができない。塩から作ってますか、赤臍を入れなけりゃだめです。いまは違いますが、塩カラを昔つくったときはカマスに入れて合羽きて体ごと入って作るんですよ。スルメも当時は天日にさらして固くなったのを整えるんですが、どうすると思いませんか？ 口

でこう嘸んで手でのばすんですが、いま一つあるんですよ、足を使うんです。もちろんわたしの小さい頃ですが。一晩かけて十枚一組で十銭でしたね。もう沢山やっただんです。だから一円稼ぐったら大変なもんですよ。

相京 アルバイトですか？

岩織 家計のたしにしてね、大人の三分の一なんです。そうです。いまは全部機械化です。

(シオカラやイカの話がしばらく続くが略、ひとつだけ) 相京 この前八戸に行っただでしょう、そこで美味しかったのは「腑合え」っていうの、あれは抜群だった。食べたのはそれと北寄貝とホヤね。この前も市場へ行ってオバちゃんに作ってもらって、海水入れて塩たして、ホヤを東京へ一袋もってきたんだけど、結局石井さんと食べちゃったネ。そうか、田谷さんにも少し。

岩織 今日は別に固い話しても何ですけど、わたし、相京さんに初めて会ったとき、五年前、恵比寿駅でしたか祐天寺の石川すずさんを訪ねるのに喫茶店で待ち合わせたとき、初対面だったんですが、お互いにすぐわかったんですよ。わたしも議員やっていますが、本当に気を許せる人というのはそんな

にいないですよ。でも相京さんと初めて会って、ああ、この人とは何でも話せる人だなあ。ええ、今日まで。みなさん今日お会いして、こんな友だち沢山もっているんだなあって。

わたしもいろんな運動してて、相京さんにもよくいうんですが、わたしは人間の心を大事にしたい気持だけなんですよ。

それひとつ。わたし主義の為に生きるとは思っていないです。人間の為というのが前提ですから。そういうことで永嶋暢子を知ってきた、相京さん通じて八木秋子を知ってきた。もちろん、永嶋はマルキスト、八木秋子はアナキストですがね、そこで共通してるのは人間をきちっとみてきた、みている、そういうこと。それを一番大事にしてること。で、今日、みなさんとお会いして、飲んだり騒いだり川をのぼったり山へ行ったりいろんなことしているようですが、やっぱり人間関係を大事にしてるんだなあ、そう思いました。まあ、永嶋暢子はたまたま八戸から出てきて運動したんですが、本当の夢というのは世の中のひとりひとりが幸せになることだと思っていたでしょうし、八木秋子も同じ気持だと思っただけです。今日は本当に、わたしぜんぜん影も形もなくして地肌を出してお話しますが、ひとつ、これからもよろしく。みなさん、いっしょにやって下さい。それがわたしに伝わってきま

すから。で、彼と共通してるんですよ、相京氏とわたしはね。八木秋子と永嶋暢子の関係はね、今までの日本ではちょっとないですよ。女性同士の、本当に人間的な結びつきをもった間柄はないと思います。それだけ素晴らしい人間だったなあ、そう思ってるんですね。で、相京氏は八木秋子、わたしは永嶋暢子をこれからも頑張っていきたい、そう思ってます。

大宮 エッ、わたしやるんですか？ あの、相京さんとは同じ群馬県の出身で、岩織さんは相京さんが紹介して下さって、一度三人で飲みましたけど、『銃後史ノート』でなししろ、八木秋子を書いてみたいという一念で、相京さんに八木秋子のことを聞かせて下さいといってお会いしました。で、わたしは八木秋子が満州へ行ったことが気になって、その『満州へ渡った女』というので書いてたんですが、書いてみて、まだ引っかけってますが。八木秋子は戦後を迎えたわけですね、その彼女の戦後に対する姿勢というのがわたしは好きで。ええ、戦前の運動というよりも、むしろ、そのあとの姿勢が好きで、永嶋に対することが彼女の戦後の姿勢につながっているのかなあ、そう思ってます。そのあとは全然進まないでいます。

相京 大宮さんは岩織さんご存知だったからあれですが、隣

りの石井さんは八木さんが老人ホームへ入るとき、清瀬のアパートまで行って荷物を運んでくれた人なんです。あのアパートへ行ってるのは石井さんだけだね。そのころ会ったばかりだったんですが車の都合つけてくれたんです。とにかく手紙や日記なんかも捨てちゃうなんて八木さんが言ってたんです。そのあと、印刷関係の人なんで、著作集なんかでも世話になってます。それから家族同士でキャンプに行ったり、川のぼったり山へ行ったりしてます。

石井 わたしは印刷関係の仕事を始めたころ相京と会って。

まあ、いま、岩織さんがいわれたように人と人との関係ということでずっと気になっていたことがあって、ぼくは一時期その組織論というもの前にあるのが人間関係なんだというように思っていたんです。そしたら、あるやつが獄中から友だちに手紙よこして、おまえらは単純人間関係論者だ、そういつてきて、それは非常にうまいこと言ってくれたな、そう思ってた。いま岩織さんが人間関係のことを話されて、それでいいんだ、そういわれて、それがあから相京や田谷さん、それからこのまえ山梨の小屋で飲んだくれた真辺さんやいろんな人と出会って、自分を大事にしてくれる人、それから相手を大事にしてくれる人、そういう関係でつながって

いると、そう酔った頭の中で整理してる所なんです。

さっき、八木さんの荷物を運んだという、運送屋みたいなことを相京は言っていました。あのアパートへ行ったらときは衝撃的だったんですよ。あれは何年だったかな、七十六年か。

八木さんはテレビ見ていてね、片付けなけりゃいけないっていう部屋の中みると、わたしが年寄りというイメージと全然ちがう世界があるんです。たとえば本なんかね。それで何かずっともっていて、もっていて生活があるんだというつながりが見えてきたんですね。そのばあちゃんがこうやってリンゴむいてくれるんだね。むきながらポトって落としたりして、よく来てくれた、よく来てくれたって言ってその落したリンゴ食べろっていうんだな、まあ、すんません、そういって食べただけ。そういうひとつの何かがこっちに伝わるものがある。わたしがそのあと八木秋子の世界をちらってみせてもらっている、実際、本気になって著作集も読んでみせんが、ただどあの時どういう生活をしてたかそれが頭のスミに残っているんですね、今でも。それで、ひとりの人間が意志をもってひとりで生きてゆくってえのはこういう世界だな、それを見せて貰った。だからそのイメージしかないですよ。そのあと相京のやることに水かけたりしてますが。葬儀の時

もいったんですがとにかく最初のイメージですね。そのあとのことは今ひとつ明確じゃあないんですが。まあ、これから自分が生きてゆく中で、その時、その時、八木秋子の死が見えてくるかなってそう思うときがあってワクワクしてきますね。それからさっき岩織さんがおっしゃったことを訂正しなけりゃいけないんです。川上りに同行してる石井じゃあないんです。石井に同行してるのが相京なんです。

(爆笑)

寺木 八木秋子を通じて永嶋暢子を知ったのですがこういう場にこられて面白いなあと思いました。本を読ませて頂いて結果だけを書かれたのではなくて取材の途中を書かれている所が面白いと思ったんですね。それからさっきおっしゃったんですが、人と人との関係を大事にするということは本の中にも表われているなと思いました。たとえば相京さんと一緒に聞き書きに行きましたね、それでわかったことを書いてもいいですよ、研究書とかそういうのは。だけど途中の報告にもわかるようにしているいろいろな書かれているわけですよ。本の途中を大事にする所があって面白いなあと思ったんですが。

田中 八木秋子の「あるはなく」を島根の共同体にいるとき新聞で読んで申し込んだんです。それが最初のことです。八木秋子のことも日記も印象に残ってはいたんですが自分のことを考えるとそれが負担になっていた時期もありました。それがしばらくして「あるはなく」が二年ぐらい途切れたことがあったんですね。その当時は集団で共同生活をしていて。

岩織 すると、バシナに書かれた田中さん？

田中 ええそうですね。三年前にそこを出まして。その共同体ではノルマとか予定とかで追われていた時期だったので、その二年も待てる関係というのがうらやましくて。それ以降、八木秋子がなくなるとそれから出された「馬頭星雲号」ですか、あれがすごく印象にあつて、東京に出てきたとき相京さんに連絡して、それからたまにお会いして、まあ、結局、最終的にはあたしは駄目だなあと思っちゃうんですが。そういう意味では人との出会いというのは印象があつて。永嶋暢子のことですが、今の女性の考え方、あたしにしても意外に保守的だなと思いますが、その当時の組合を作るという中味が書いてあったのを読んで、その頃のひとの方が進んでるなあと思いました。

岩織 本当ですよ。今のほうが全然ダメですよ。あれは素晴

しいですよ。あっ、いいですか、わたししゃべって。女子労働者の研究が全然されていない、日本では。男性中心です。あつてもリーダーとか、男性の歴史に合わせるだけです。下でささえている運動という所までいかないと。

石井 運動史についてしても、その時代の気分を伝えるものがないように思えるなあ。

(同感とか個人史もとか、騒然、整理不能)

相京 岩織さんも真辺さんも、大宮さんも田中さんも初めてお目にかかります。(出会いは？ とか騒々しい) わたしが高校一年のころ三年で(聴取不能) ……七〇年に上京して友人が沢山いて富沢さんもその頃から…みんなに妹のようにして貰ってそのままきたように。…わたしは欲張りとかがままで、いつもおこられてますが、お酒を飲んだときはわたしがもう威張るんです。いや、わたしは飲めません。(略)

富沢 ええ、先程来、人と人との出会いといわれましたが、あたしと相京との出会いと全く記憶がないんですね。まあ、会ってから考えてみたら、なんだお前、幼稚園の同級生じゃないかってことになって。いや、全く知らなかったんですが、そのときも。まあ、だいぶ酔ってますが、友だちの友だちは友だちだ、っていうふうなあれがありまして、まあ

相京との関係はこっちにおいて、相京と友だちならこの人とあたしも友だちでいいじゃないか、実際、どういう人間であらうと何をやっている人間であらうと基本的にはそこなんですよ。八木さんと会ったときも何も知らないで会って、この人、一体なんだ。それがあとあとまで気になってはいるけど、でも基本的にはそれでいいじゃないか、そう思っているんですよ。

(上州男のバクチ好きの話から雑多な話、整理不能)

真辺 ぼくが相京さんに初めて会ったのは今年の五月なんです。一番新しいんです。でも、相京さんに言ったんですが、同じ時代を併走している、流れている、それを大事にしようじゃないか、ぼくはそう言って。そして、ある、ぼくがずっとつきあっていた笹本というものが五月になくなって、笹本さんを媒介にして知り合って。やっぱり、一緒に同じ時代を、こう、ひとつの窓から世界と一緒にのぞいている、そういう感じがあるんです。それを大事にしたいとぼくは思っているんです。いまの、このときを。

相京 いいですか。真辺さんがね、山へ登って風を感じる、その場所でなければ感じられないものが一番大事だと、一番信じられるのはそれであると、そう書いて。自分もそう思う

んですすね。で、今日、岩織さんを囲んで、というのは書かれたものをただ読んで貰うんじゃないかって、その人の表情だとか雰囲気だとかそれが信用できることなんです、オレ達が信用するのは。そこで今日この場所でもみんなと会えればと思っただけです。

石井 全くオカシイ話で、今日は永嶋暢子の本ができた、つまり書かれたことを軸にして集まっているにもかかわらず、書くなんてどうでもいいんだなんて言っている。それがオカシイなあ。

(話の途中から爆笑)

岩織 いやオカシクないです。

石井 いやオモシロイなあ。

岩織 そうなんです。というのは、書く人はいろんな為に書く……。

真辺 こうなんです。コンパスで円を書きましてね。そしてちょっとズラして書いて、重なるということ、それが生きていくということだと思っんです。

(そう、こう言って話が重なってしまい、テープに近かった人のかち)

相京 重なっている所で会えばいいんです。

岩織 あ、わたし、しょっちゅういんですよ。わたしは共産党の市議だけど、自民党の議員たちと意見が合うことがあるんですよ。どういう立場であっても一所懸命に生きようとしていけばね、わたしは共通点があると思うんですよ。永嶋も八木も主義主張で人間は判断しないと。だからわたし組織とぶつかることもあるんですが、とにかく一所懸命苦勞してやっている気持をね、大事にしたいんです。

真辺 だから、組織があつて人間があるんじゃないやなくて人間があつて組織があるんだと。

石井 簡単なんだよね。組織なんていったって、こうさばいていけば残るのは人間関係だけなんで、それをぐっちゃらぐっちゃら。ただね、そのぐっちゃらの世界観は否定しないんです。岩織さんはそのぐっちゃらの中で人間関係をだけど持ってきたということなんだろうなあ。

さっき真辺さんがいったように隣りにすわった人間は仕方がないもの。ただね、どこかの駅でこいつ叩き出そうと、次の駅か、どこか。二つ目ぐらい先の駅はどこだぐらいは自分の力量でもって考えて叩き出そうと、その場面は作り出そうと。

岩織 ねえ、相京さんをとおしてこう見てるでしょう？ 永

嶋をとおして八木を見るとね、アナキストという存在、それはね、一番すつとね、人間を厳しく追求している人達だろうと、こう思うんですね。組織はどうしてもね、そこを無視してやってしまう所があるんですね。それが一人一人の人間を大事にしようということであればね。そして共産党がそうあつて欲しいというようにわたしは思っているんです。でも、日本はまだまだ時間がかかるだろうなあ。いい友達です。わたしもね、浜の人間たちはほんとうにそうなんです。地肌で生きましようよ、地肌で。

真辺 地肌で生きるといふのはいいですねえ。

〔出席者〕

岩織政美 相京範昭 大宮みゆき 石井誠  
寺木紹子 田中久子 富沢透 真辺致一  
田谷満 吉田豊晴 相京香代子 トモヒロ  
りえ



このあと岩織さんの南部牛追い歌、八戸小唄、真辺さんの桜島山、石井さんの「長野県出身者不在」をみんなに確めての安曇節がとびだしました。岩織さんが帰られても囲む会はやはりこのあとも延々と続きましたが、この辺でテープは止めました。酒の席にテープを持ち込むとは、ケシカランという一般的な考えはありますが、ひとまわりの自己紹介あたりまでの酒は、出席された方にとっては唇をしめらす程度だったらしく、かえって飲んだら冴えた方もおられたようです。酒はアタマの潤潤油、ということでしょうか。しかし、途中からさすがに話がスリッしていますが、そのズレ方は、これはこれで、その人の関心のもちようがわかるし、その場にいた人にはわかってのことなので面白い。なお、文責者の特権で削った所が多くあります。それから、ひとり田谷満さんの話がのりませんでした。影も形もあるわけですが、どうもタイミングがズレてのりそこねてしまったようです。いつも「人は黙って汗をかけ」といってますから、それを実行したのだと思っております。なお、吉田豊晴さんがあとからかけつけ、フルートを吹いて下さいました。

(相京)



四六判 本文 三三七頁  
 口絵 六頁  
 定価 二〇〇〇円  
 送料 一五〇円